

「上級2(700レベル)口頭表現」授業報告

福田 恵子

【キーワード】 論理的思考力、スピーチ、討論、ディベート

1. はじめに

本稿は、現在筆者が担当している「上級2(700レベル)口頭表現」の活動内容をまとめたものである。「①論理的に意見を表明できる ②論点を整理しつつ、討論やディベートができる ③討論やディベートの司会ができる」を目標に、2010年度からは、新たに発音指導を加え、週1コマ(90分)の授業を15回(内2回は授業についての説明)行っている。この目標を達成するためには、一貫して論理的思考力の養成が欠かせない。本稿における論理的思考力とは、客観的事実を証拠に予想される反論より自論が優れていることを証明する能力である。筆者は、以前「スピーチ演習カリキュラム」(牧野・福田、2005)に参加し、論理的思考力により他者を説得するカリキュラムを体験した。そのカリキュラムの一部を参考に、この授業用にタスクシートを作成し、論理的思考力を養成することを念頭に各活動を行っている。2010年度春期を例に、時系列に活動を追いながら、論理的思考力を養成するにあたって使用したタスクシート(A3版を縮小したもの)を稿末に掲載し、説明を加えたい。

2. クラス開始時(1、2回目)

クラス開始時は、受講生の登録が不確定であり、「この授業の目標、目標に向かってどのような活動をするか、評価はどのようにするか」などの説明を行うほか、お互いを知る雰囲気作りのため、また、どの程度まとまった話ができるのか、日本語の発音に問題がないかを知るために、一人ずつ皆の前で話をしてもらう。その際、5センチメートル四方のさいころを一人ずつ投げ、出た面に書いてある話をしてもらう。さいころ6面に書いてある話は、「自慢話」「思い出にのこった話」「情けない話」「笑える話」「恋の話」「はじめて〇〇した話」である。一回目に出た面の話がどうしても無理であると言う学生に対しては、もう一度さいころを投げさせているが、それほど抵抗もなく、出た面の指示通りの話をし、その話によっては聴衆の笑いを

さそい、雰囲気作りに貢献している。例えば、「自慢話」では「私の弟は、ハンサムで、頭もよく、スポーツマンです。家族の自慢です。・・・」、「情けない話」では「私は日本語を自分の国で何年も勉強しました。それなのに、この間、日本人の質問の意味がわからなくて、・・・」といった具合である。まだあまりよく知らない相手を前に、日本語で話すという行為は、緊張感を伴うものであろうが、内容が比較的人間味のあるものであり、教員、学生同士の距離を近くする。ただ、出席学生が多い場合は、希望者のみにさいころを投げさせている。

3. 論理的思考力養成

3回目

クラス開始から3週日以降は、履修学生が確定し、目標に向っての活動が進められる。「①論理的に意見を表明できる」の目標に向けては、意見表明のスピーチを行っている。まず、意見表明のスピーチの目的を「自分の考えを他者に伝え、納得させること」であると説明し、実際に教員が意見表明のモデルスピーチをしたり、ビデオを視聴したりして、どのようなスピーチが期待されているか、感じさせる。その際のモデルスピーチ、視聴させるスピーチは、テーマにはこだわらないが、論理的にはしっかりしたものを選んでいく。

そして、テーマは自由とし、意見表明のスピーチ原稿を書かせる。学生には、まだそれほどの説明もないまま、もう原稿を書くのかという印象を与えるかもしれないが、この原稿はその後の学習に教材として使われる。

4～5回目

論理的なスピーチをするためにどのような要素が必要か、各要素の説明をし、要素同士のつながりを図で示しながら説明する。(タスクシート1)

要素を定着させるため、前述のモデルスピーチを文字化したものを配布し、要素に下線を引かせる。さらに、学生の書いたスピーチ原稿に、どの要素があり、どの要素が不足しているのかを書かせる。

要素④のデータに関しては、どのようなものが適切であるかを説明し、要素の過不足に加え、要素の適切さを問う問題をさせる。問題は自作もあるが、本稿では、『ピアで学ぶ大学生の日本語表現』（ひつじ書房）に掲載された問題を基に筆者が作成した問題を示す。問題は、個々に考えさせ書かせてから、口頭により答え合わせをするが、教員が気がつかなかったような鋭い指摘もあり、考えさせられる。問題の一部(タスクシート2-1、2-2、2-3)を示し、行書体にて答えを記す。

今回はスピーチをするに当たっての論理の組み立てをする旨の予告をし、テーマを考えて来るよう指示する。その際、3回目の授業で書いたスピーチ原稿と同じテーマでも新たなテーマでもよいが、データが収集しやすいテーマを選ぶよう指示する。

6～7回目

教員が主張を提示し、その主張を軸に論理の組み立てを行うことによって、論理の組み立て練習を行う。例えば、「電車内に優先席は必要ない」という主張を提示し、学生が根拠、どのようなデータがいいか、想定反論、想定反論に対する反論を考える。この練習を数回行うことにより論理が組み立てられるようになった後、各自の意見表明スピーチの主張に基づき論理を組み立て(タスクシート3)、提出させる。

教員は、日本語のチェックのみ行い、そのシートを両面コピーする。本人以外の2名の学生がその論理の組み立てを各々チェックし、コメント欄にコメントを記入する。コメント記入済みのシートのコピーを本人に渡し、コメントを参考に再度論理の組み立て(タスクシート4)を行い、提出させる。この論理の組み立ては評価対象にしており、採点后返却する。

前述の第1段落から第2段落にかけて、教員のチェック作業等が入るため、この時間を利用して学生にスピーチのビデオを見せ、視聴したスピーチの各発表者は、①だれに対してメッセージを伝えようとしているか／②内容が論理的か／③発表者の表現力(声、アイコンタクト、ジェスチャー・・・)を評価させる。

教員のチェック済みの論理の組み立てに基づき、スピーチ原稿を書く作業は、宿題となり、添付ファイルによる提出を奨励しているが、それが難しい場合は次回提出する。

8～9回目

教員は添付ファイルによって提出されたスピーチ原稿をチェックし、返却する。発音指導の後、スピーチ原稿に区切りを入れさせ、何度も読むことによって覚えるよう指示する。発音指導は、『さらに進んだスピーチ・プレゼンのための日本語発音練習帳』(ひつじ書房)の第一部基礎編(p.1～12)を使用している。

10～11回目

登録学生数によって1～2コマをスピーチ活動に当てているが、全て録画し、後日そのDVDを回覧し、各自に自スピーチを評価させ、提出させる。

スピーチにかかった時間を計るが、これは時間制限をしているわけではなく、時間感覚を身に付けてもらうためのものである。スピーチ後に、どのくらいスピーチしていたと思うかを尋ね、その後実際にかかった時間を伝える。実際にかかった時

間と、自分が感じた時間の差を感じてもらい、今後の時間感覚の参考にしてもらえようとしている。

12～15回目

学生のスピーチのテーマを参考に討論とディベートのテーマを選ぶ。2010年度春期の学生のスピーチテーマは、「セミ・ベジタリアン／麻薬／就職活動／成人年齢引き下げ／子供のインターネット利用／古文を学ぶべき／スペインの不登校問題／日本の国際化／休日のとり方」であった。まず、ディベートに適したテーマ（今回は、「セミ・ベジタリアンになるべき」「麻薬を合法化すべき」「成人年齢を引き下げるべき」）を選び、ディベートに選んだテーマ以外から討論のテーマを調整した結果、討論のテーマは「教育」「余暇」とし、その観点としてスピーチのテーマを関連付けた。討論かディベートで全員が司会を担当できるよう、討論は観点ごとに、ディベートはテーマごとに司会を交代した。討論とディベートの表現は、事前に覚えてくるよう表現プリントが渡されており、活動中はなるべく見ずに行うよう指示されている。書記については、司会と書記との日本語のやりとりにかえて時間がかかるとの発言もあり、司会の任意としている。テーマとその観点、観点別に関連するスピーチのテーマを（ ）に挙げる。「教育」観点：不登校という点から（スペインの不登校問題）／教育科目という点から（古文を学ぶべき）／大学教育という点から（就職活動）／インターネットが教育に及ぼす影響という点から（子供のインターネット利用）、「余暇」観点：学生の休暇という点から／社会人の休暇という点から／休日の過ごし方という点から、討論した。「余暇」の観点は、日本と留学生の国の比較が主に討論され、（休日のとり方）（日本の国際化）といった観点も取り入れることができたかと思う。

討論においてもディベートにおいても、論理のしくみ図（タスクシート1）を意識させ、意見を述べる際には、その根拠と根拠を証明できるデータを、意見を聞く際には、相手の根拠やそのデータに弱点はないかに注意するよう指導した。また、『日本語超級話者へのかけはし』（スリーエーネットワーク）の第9課「働くことの意義について討論しよう」、第12課「マスコミの功罪について討論しよう」の練習問題によって、さらなる論理の意識付けのほか、表現の定着を図った。

4. 受講生によるアンケート

学期末に6段階評価（0が最下位、5が最上位）によるアンケートを実施した。アンケートは、授業終了時に渡し、翌週の回収としたため、登録学生9名（単位取得

7名)中、4名しか回収できなかった。アンケート項目は、1:論理的な思考力が身についたか、2:発音指導はもっと必要か、3:ビデオ録画は参考になったか、4:討論、ディベートの司会が上達したか、5:以前より討論、ディベートに積極的に参加できるようになったかを、0—1—2—3—4—5のうちから一つ選ぶものと、6:ほかにどんな活動がしてみたかったか、記述するものである。評価の平均値(4名の実際の数値)は、1が3.75(3、4、4、4)、2が3.5(2、4、4、4)、3が3.5(0、4、5、5)、4が4(3、4、4、5)、5が4(4、4、4、4)である。6には「気軽に会話するような討論をしてもいい」との記述があった。論理的な思考力は、論理の組み立て練習の後、さらに学生同士のチェックの後と、徐々に身についていく。しかしながら、論理的な思考力を養成するための活動の評価(特に1、4、5の評価)は概ね4であり、さらなる改良が必要であるとの認識を得た。

参考文献

- 大島弥生ほか(2005)『ピアで学ぶ大学生の日本語表現』ひつじ書房
- 中村則子ほか(2009)『さらに進んだスピーチ・プレゼンのための日本語発音練習帳』ひつじ書房
- 荻原稚佳子ほか(2007)『日本語超級話者へのかけはし』スリーエーネットワーク
- 牧野、永野(2002)「表現・コミュニケーション能力の育成のためのスピーチ演習カリキュラムの開発」『日本教育工学会論文誌』vol.25 No.4
- 牧野、福田(2005)「授業改善の実践共同体における遠隔ネットワークキングの可能性」『日本教育工学会論文誌』vol.29 No.2

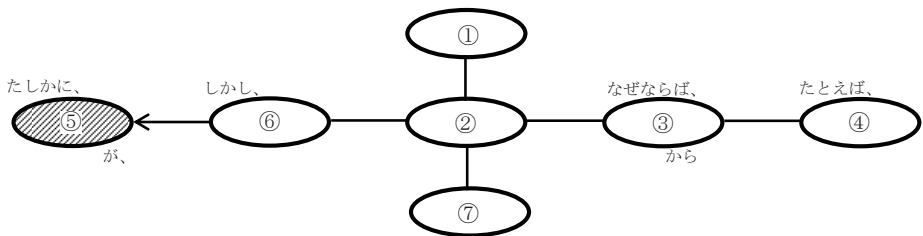
タスクシート1

I 各要素

1 要素の説明

- ① **背景** (このスピーチをしようとしたきっかけ)
- ② **主張** (自分の考え、言いたいこと)
- ③ **根拠** (主張をする理由)
- ④ **データ** (根拠が正しいことを証明できる、信用できる情報)
- ⑤ **想定反論** (考えられる反論)
- ⑥ **自論 > 想定反論** (考えられる反論より自論が優れていることの指摘)
- ⑦ **まとめ** (①～⑥のまとめ)

2 それぞれのつながり



(牧野 (2002) を基に福田が作成)

II 自分の原稿スピーチを同じようにチェックしましょう。

- ①～⑦があれば、下線を引き、番号を記入しましょう。
ない番号は何番でしたか。 ()
ないものを原稿に書き加えましょう。

タスクシート2-1

A～Cのスピーチ原稿には①～⑦の何が不足しているでしょうか。

不足部分を書き加えましょう。

また、①～⑦の各要素は適切でしょうか。

A ボランティアの義務化

ボランティアを学生に義務化することに賛成します。第一の理由として、ボランティア精神ははじめから人の中に存在するのではなく、徐々に育つものだからです。私は、高校生のときボランティアを学校でやらされましたが、最初は文句を言っていた友だちも次第にそれが楽しくなってきたと、皆、言っていました。誰でもそういうものではないでしょうか。最初は強制的にやらされていても、だんだんボランティア精神が心の中で目覚めると考えられます。しかし、以前は高校でボランティアをさせることはありませんでしたが、自己中心的な若者は現代ほどいませんでした。何かほかに問題があるのではないのでしょうか。

1 ①～⑦があれば、下線を引き、番号を記入しましょう。

ない要素は何ですか。(1 5 6 7)

どんな内容がいいでしょうか。

下から3行目「しかし・・・」以降は5か6かに見えるが、テーマ自体がずれてしまっている。

2 各要素は適切ですか。不適切な要素の番号を○に書き、なぜ不適切なのか原因を考えましょう。どのように改善すればいいでしょうか。

④個人的体験は、客観性に欠ける。

ボランティアをする前のアンケート結果と、した後のアンケート結果を比較(改善策)

○

○

タスクシート2-2

B 英語教育は小学校から

現在、日本では英語教育に力を入れているものの、期待した成果がでていません¹。
現代の国際社会において、英語は世界の共通語です。英語ができることは、国際人として最低限
当たり前の能力です。日本が国際社会で一流であるためには、日本人の英語力向上が必要不可欠
です。

また、語学、特に会話は絶対に若ければ若いほど上達が速³です。私自身、中学から大学まで
10年間英語を学んだにもかかわらず、読み書きはともかく、いまだに会話はうまくできません⁴。
自分の体験から考えて、やはり会話は小学校のうちからやらないと上達できない³と思います。小
学校から英語を学べば、英語に強い日本人が育ちます³。

一方、公立小学校では、最近授業時間数の削減などにより、計算力や漢字の習得といった基礎
的学習に時間を十分取ることが困難になり、学力低下が進んでいます。そんな中で英語の授業時
間を確保するのは難しいでしょう⁵。

英語は、インターネットの共通語であるのですから、今のように世界の中で日本人だけが英語
が苦手であるという現実を変えなければならないのは、明らかです。以上のことにより、やはり、
小学生から英語を学ばせるべきです²。

- ①～⑦があれば、下線を引き、番号を記入しましょう。
ない要素は何ですか。(6 7)
どんな内容がいいでしょうか。
音楽の時間に英語の歌を教えるなど、英語を教えてもいいのではないか。(6の内容として)
- 各要素は適切ですか。不適切な要素の番号を○に書き、なぜ不適切なのか
原因を考えましょう。どのように改善すればいいでしょうか。
④個人的体験は、客観性に欠ける。

英語を導入している小学校を卒業した中学生と、まだ導入されていない小学校を卒
業した中学生の英語の学力比較。(改善案)

○

○

タスクシート2-3

C 中学生の携帯電話

中学生は携帯電話を持つべきではありません²。インターネットや携帯電話を通じて、未成年者が犯罪に巻き込まれるケースは増加の一途をたどり、また、非行や学業不振の遠因にもなっている¹からです。さまざまな情報を携帯電話を通じて手軽に入手できる現代の情報化社会は、便利さが増す⁵一方で、無防備な子供たちを有害情報にさらす結果となっています³。携帯電話をめぐる未成年者の問題行動は、出会い系サイトの利用、無計画な電話利用による浪費、授業中のメール交換など学習面への障害、また犯罪や暴力行為のための連絡など多岐にわたっています³。新聞報道によると、非行中学生の携帯電話所有率は、6割強（毎日新聞、2004年6月25日）とも、7割強（朝日新聞、2004年6月24日）ともいわれ⁴、彼らの携帯電話の強い依存傾向が指摘されています。

- 1 ①～⑦があれば、下線を引き、番号を記入しましょう。

ない要素は何ですか。（6 7 ）

どんな内容がいいでしょうか。

便利を情報化社会の一例として、塾などへの迎えを携帯電話で親に連絡。（5の内容として）

塾が送迎バスを用意すればよいのでは。（6の内容として）

① と③は同箇所

- 2 各要素は適切ですか。不適切な要素の番号を○に書き、なぜ不適切なのか原因を考えましょう。どのように改善すればいいでしょうか。

④非行中学生の携帯電話の所有率だけでは、非行と携帯電話の因果関係が証明できず。

携帯電話を所有している中学生の非行の割合と、携帯電話を所有していない中学生の非行の割合の比較が必要。

また、非行の定義の明確化が必要。

⑤便利さの具体例があったほうがよい。

夜遅くなった場合、保護者との連絡が容易。

犯罪に巻き込まれそうになった場合、携帯電話による110番通報が可能。

○

タスクシート3

□□□ (月 日) 組 氏名 _____

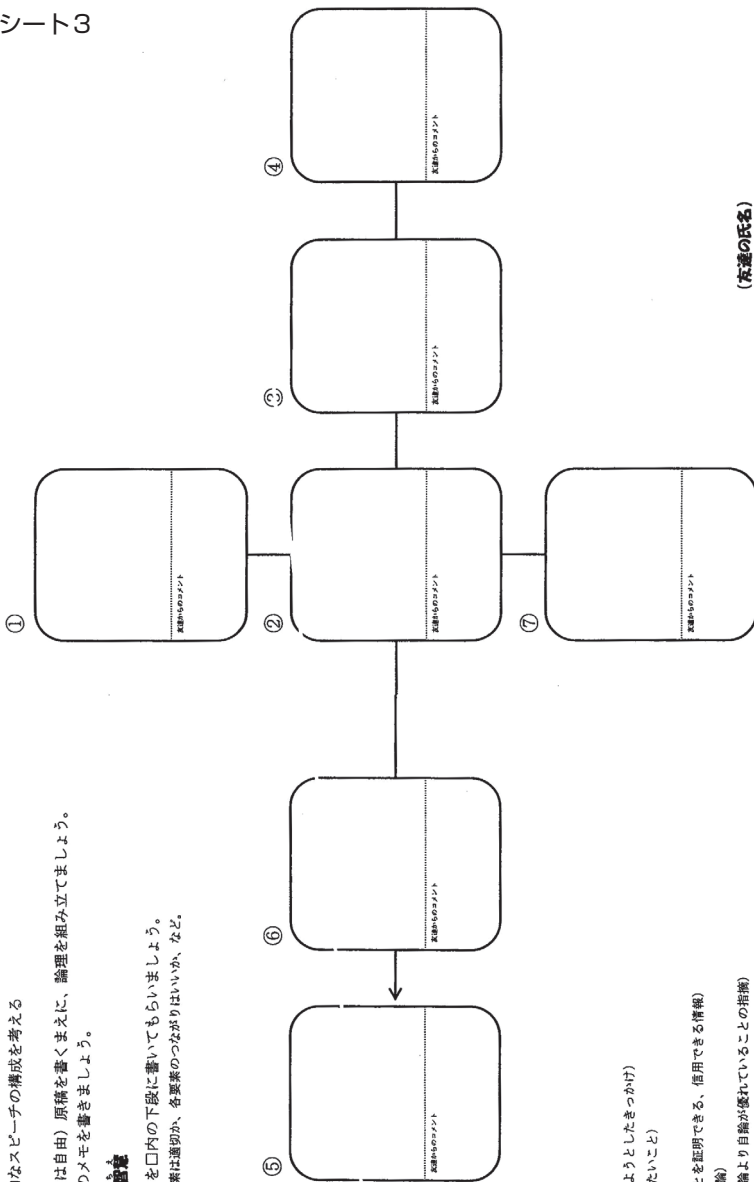
論理的なスピーチの構成を考える

スピーチ (テーマは自由) 原稿を書くまえに、論理を組み立てましょう。
□ の中に、構成のメモを書きましょう。

三人寄れば文藝の盛衰

友達からコメントを□内の下段に書いてもらいましょう。

コメント：各要素は適切か、各要素のつながりはいいか、など。



- ①背景 (このスピーチをしようとしたきっかけ)
- ②主張 (自分の考え、言いたいこと)
- ③構論 (主張をする理由)
- ④予言 (主張が正しいことを証明できる、信用できる情報)
- ⑤想定反論 (考えられる反論)
- ⑥自論 > 想定反論 (想定反論より自論が優れていることの指摘)
- ⑦まとめ (①)~⑥のまとめ)

(友達の氏名)

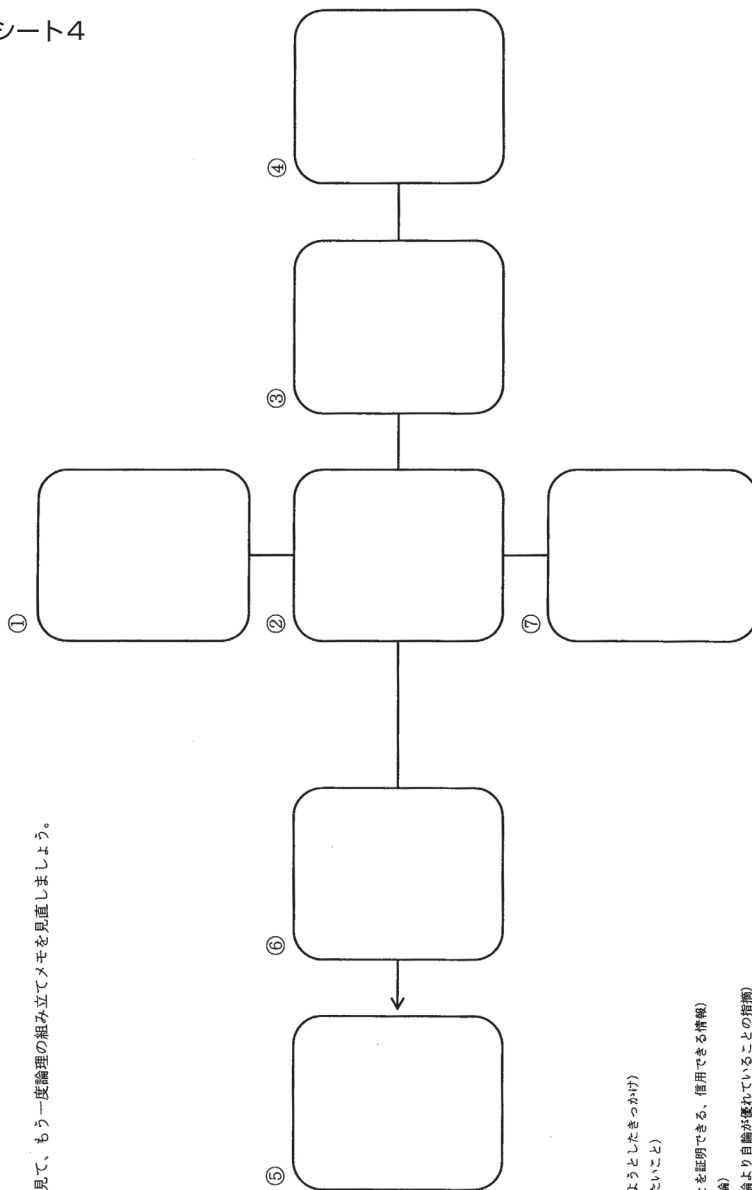
よし

タスクシート4

（ 月 日 ） 組 氏名 _____

名 姓

友達からのコメントを見て、もう一度論理の組み立てメモを見直しましょう。



- ①背景 (このスピーチをしようとしたきっかけ)
- ②主張 (自分の考え、言いたいこと)
- ③理由 (主張をする理由)
- ④予言 (根拠が正しいことを証明できる、信用できる情報)
- ⑤想定反論 (考えられる反論)
- ⑥自論→想定反論 (想定反論より自論が優れていることの指摘)
- ⑦まとめ (①～⑥のまとめ)

